

社会福祉系の学科内に設置された4年制保育士養成課程における大学生の保育者資質に関する意識変容

青木 通*

Key Words : 大学生, 保育者資質, 意識変容

1. 緒言

少子化, 未婚化・非婚化, 晩婚化・晩産化の進行や就労形態の多様化, あるいは, 家庭や地域の子育て力の低下などが叫ばれ子どもの生活環境, 子どもを育てる環境が大きく変化している。「第4回幼児の生活アンケート」(ベネッセ次世代育成研究所, 2011)によれば, 早寝早起きが増えるなど生活習慣や生活リズムは健全化の傾向にあるものの, 遊び相手は母親が中心となり兄弟や友だちと遊ぶ割合が減少していることが報告されている。また, テレビ, DVD等のメディアとの接触は1日2時間以上の幼児が約6割とされ, 低年齢未就園児の視聴時間が長くなっていることも報告されている。このような調査報告を一例として, 幼児が人と関わることの経験不足はよく指摘されていることであり, 子どもの人間形成に悪影響を及ぼすことが考えられる。さらに, 子育てに関する不安や悩みをもつ保護者は増加傾向にあり(厚生労働省, 2006), 子どもの保育とともに保護者に対する支援も必要になっている。加えて, 保育の現場では発達障害児をはじめとした障害児数の増加(厚生労働省, 2008), 保育所入所待機児童数の増加(厚生労働省, 2011a), 児童虐待相談対応件数の増加(厚生労働省, 2011b)などを背景として保育に関する新たなニーズが発生し, 保育所等の児童福祉施設に対する社会的な役割期待が大きくなっている。これにともない, そこで働く保育士にはこれまで以上に高い専門性を有し, 保育に関する確かな知識, 技術, 能力をもった資質が求められている。このような意味から, 特に保育士養成認定校に課せられた責任は重く, 養成に関わるカリキュラムについては常に検証, 検討していく必要があると考える。そのためには, 保育者を志して入学してきた学生自身が保育者としての専門性や資質についてどのような認識をもち, それが在学期間中にどの

* 人間学部人間福祉学科

ような変容過程を経て職に就いていくかを明確にすることは養成校としての教育内容の工夫、改善に大きな意味をもつと思われる。

そこで、本研究においては4年制大学の社会福祉系学科内に設置されている保育士養成課程を事例として、大学1年生の保育者資質に関する認識の変容過程を前期授業開始時点と前期授業終了時点との比較から検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

埼玉県内に立地し、社会福祉系の資格取得を基本としながら2009年度に保育士資格も同時取得が可能となった4年制大学1校を事例対象とした。保育士養成課程に在籍する1年生36名を対象として、同一内容の質問紙調査を前期授業開始時点と前期授業終了時点で2回実施した。調査時期は第1回目調査が2011年4月中旬、第2回目調査は2011年7月下旬であった。いずれの調査も授業時間を利用した集合法により実施した。なお、調査にあたってはその都度調査の目的を説明し、個人情報保護や倫理面での配慮を行った。また、調査結果の学術研究利用については調査票に明記するとともに調査時に口頭での説明を加え、同意が得られた場合のみ回収した。

2. 調査内容

基本的属性として年齢、性別、入学形態、調査時点までの子どもを対象としたボランティア活動の参加程度を尋ねた。また、保育士関連の資格や就職先の希望の程度を問う内容として、保育士資格取得を希望する強さの程度、卒業後に一般的な保育所の保育士になることを希望する強さの程度、児童養護施設や乳児院などの児童福祉施設で保育士になることを希望する強さの程度、現時点で保育者としてどの程度の適性があるかについて自己評価する4項目を設けた。さらに、他資格に対する希望を問う項目として、社会福祉士受験資格、精神保健福祉士受験資格、幼稚園教諭、特別支援学校教諭それぞれについて希望の程度を尋ねた。これらの項目の回答には「5. 絶対に取りたい」あるいは「5. かなりある」から「1. 取りたくない」あるいは「1. 全くない」の5段階評定尺度を用いた。

保育者資質に関する調査項目については吉村ら(2005)が用いた「保育者の資質に関する自己認識」42項目を参考に独自の項目を4つ加えた46項目から構成した。教示は「保育者として仕事をするにあたり、あなた自身、次にあげる項目はどの程度必要だと思いますか。」とし、回答には「5: かなり必要」から「1: 全く必要でない」の5段階評定尺度を用い、各調査時点での認識を尋ねた。

3. 分析方法

すべての調査項目に対して記述統計量および度数分布を算出した。ボランティア活動の参加程度については前期授業開始時点と前期授業終了時点で変化があったかどうかを検討するためにマクニマーの拡張検定を用いた。保育士資格に関する4項目、他資格に関する4項目、保育者資質の認識に関する46項目については5段階評定尺度を否定的な回答から肯定的な回答の順に1点から5点の得点を与えて平均値および標準偏差を算出した。そして、前期授業開始時点と前期授業終了時点での平均値の差異を検討するため対応のあるt検定を用いた。なお、一連の統計処理にはパソコン用統計ソフトIBM SPSS Statistics 19（日本IBM社）を使用し、統計的な有意水準を5%未満とした。

Ⅲ. 結果と考察

1. 対象者の属性

対象者36名の男女比は女子学生30名(83.3%)、男子学生6名(16.7%)であった。年齢構成は18歳が21名(58.3%)、19歳15名(41.7%)であり、前期開始時点の平均年齢は18.1±0.2歳であった(±:標準偏差)。入学形態は現役で入学した学生が34名(94.4%)、一浪は1名(2.8%)、その他の回答として一度社会人を経験した後で入学した学生が1名(2.8%)であった(表1参照)。

表1 調査対象者の属性 (N=36)

		n	%
性別	男子	6	16.7
	女子	30	83.3
年齢	18歳	21	58.3
	19歳	15	41.7
入学	現役	34	94.4
	一浪	1	2.8
	その他	1	2.8

注1) 入学時の属性

注2) 「入学」の「その他」の回答は「社会人経験を経てからの入学」

一方、保育者資質の意識変容には子どもとの関わりの程度が少なからず影響を及ぼしていると考えられたことから、前期開始時点では入学前の子どもの関連したボランティアやサークル活動にどの程度積極的に参加したかどうかを5段階の評定尺度で回答を求めた。そして、前期終了時点では入学後の半年間の状況について回答を求めた。その結果を表2に示した。前期開始時点では「かなりあてはまる」「少しあてはまる」と回答したが学生はそれぞれ5名(13.9%)、16名(44.4%)であった。「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」はそれぞれ8名(22.2%)、

6名(16.7%)であった。約6割近くの学生が入学前に何らかのボランティア活動に積極的に参加していたものの、約4割の学生はボランティア活動などに対する参加は消極的な状況であった。前期終了時点では積極的に参加したとする学生の割合が6割を超え、消極的な学生の割合は2割半ば程度であった。半年間の大学生活で積極的なボランティア参加の割合が微増、消極的な参加の割合は減少しており、大学入学前にボランティア活動に消極的だった学生が入学をきっかけとしてボランティア活動に積極的に参加している傾向がみられた。事例校では地域連携センターを設置し、ボランティア活動に対するコーディネートや支援活動あるいは教育プログラムの実施など多様なサービスを提供していることから、ボランティア経験の少ない学生でもボランティアに対する関わりをもちやすいことが影響していると考えられた。なお、ボランティア活動の参加度について前期開始時点と前期終了時点での変化をマクニマーの拡張検定によって検討したところ統計的な有意差は認められなかった。

表2 ボランティア活動への参加度 (N=36)

	前期開始時		前期終了時		マクニマー の拡張検定	p
	n	%	n	%		
かなりあてはまる	5	13.9	12	33.3	12.33	.14
少しあてはまる	16	44.4	12	33.3		
どちらともいえない	1	2.8	3	8.3		
あまりあてはまらない	6	16.7	5	13.9		
全くあてはまらない	8	22.2	4	11.1		

注) M: 平均値, SD: 標準偏差

2. 保育士資格関連の意識変容

表3に保育士資格を取得する希望の強さ、卒業後に保育所保育士を志望する強さ、乳児院や児童養護などの施設保育士を志望する強さ、自分自身が保育者としてどの程度の適性をもっているかどうかの自己評価について5段階の評定尺度で回答を求めた結果を前期開始時点と前期終了時点それぞれの平均値と標準偏差を示した。保育士資格の取得希望に関しては前期開始時点、前期終了時点それぞれで 4.83 ± 0.38 点、 4.83 ± 0.45 点と両者とも比較的高い値を示した。職種については前期開始時点では保育所保育士志望が 3.61 ± 1.05 点、施設保育士志望は 4.08 ± 0.81 点と施設保育士志望が高い値を示したが、前期終了時点では 4.39 ± 0.73 点、 4.11 ± 0.85 点と保育所保育士志望が高い値を示した。特に、保育所保育士志望は前期開始時点と前期終了時点では平均値の変化に有意差が認められ（t値： -5.20 ，p： $.00$ ），将来的な方向性、志向性が施設保育士から保育所保育士に向かっていく傾向が認められた。この点については、カリキュラムの構成上1年次は保育の基礎的な内容に関する授業科目が多く配置されていることが影響していると推察された。保育者適性に関する自己評価については、前期開始時点は 3.69 ± 0.62 点、前

期終了時点が 3.47 ± 0.74 点と自己評価が低下する傾向にあった。入学してからの半年間の保育や保育者に関する学習を通じて、「保育士になる」「保育士に向いている」という端的な自己判断から「本当になれるのか」「自分は本当に保育士に向いているのか」といった自身の適性を再確認している状況がうかがわれた。

表3 保育士志望に関する平均値比較 (N=36)

	前期開始時		前期終了時		t	p
	M	SD	M	SD		
保育士資格の取得希望	4.83	0.38	4.83	0.45	0.00	1.00
保育士志望	3.61	1.05	4.39	0.73	-5.20	.00 *
施設保育士志望	4.08	0.81	4.11	0.85	-0.27	.79
保育者適性の自己評価	3.69	0.62	3.47	0.74	1.75	.09

注) M: 平均値, SD: 標準偏差, *: $p < .05$ (両側検定)

3. 保育士以外の他資格に対する意識変容

表4には保育士以外の他資格取得に対する希望の程度について回答を求めた結果を平均値と標準偏差で示した。前期開始時点では社会福祉士受験資格は 4.50 ± 0.65 点、精神保健福祉士受験資格が 2.86 ± 0.93 点、幼稚園教諭は 2.86 ± 1.05 点、特別支援学校教諭が 2.94 ± 1.01 点であった。これに対して、前期終了時点では社会福祉士受験資格は 4.47 ± 0.65 点、精神保健福祉士は 2.78 ± 0.90 点、幼稚園教諭は 2.92 ± 0.94 点、特別支援学校教諭は 3.33 ± 0.96 点であった。社会福祉士受験資格の取得を前提として保育士資格等の取得が可能となる学科のカリキュラム構成であることから、入学時点であっても、前期終了時点であっても取得希望の程度は高い値を示しており、社会福祉士受験資格に加えて保育士資格を取得しようとする学生の方向性が確認された。なお、特別支援学校教諭の希望については事例校のカリキュラムでは資格の取得はできないが、社会福祉に関連した資格と考えられることから尋ねた。その結果、前期終了時点の方が有意に高い値を示し、保育所保育士あるいは施設保育士ほどの高い得点は示さなかったものの、半期間の大学生生活のなかで職業的な志向性が多様化していく傾向がうかがえた。

表4 保育士以外の他資格志望に関する平均値比較 (N=36)

	前期開始時		前期終了時		t	p
	M	SD	M	SD		
社会福祉士	4.50	0.65	4.47	0.65	0.24	.81
精神保健福祉士	2.86	0.93	2.78	0.90	0.49	.63
幼稚園教諭	2.86	1.05	2.92	0.94	-0.39	.70
特別支援学校教諭	2.94	1.01	3.33	0.96	-2.28	.03 *

注) M: 平均値, SD: 標準偏差, *: $p < .05$ (両側検定)

4. 保育者資質の認識に関する意識変容

表5に保育者資質に関する46項目それぞれの平均値と標準偏差を前期開始時点と前期終了時点で比較した結果を示した。46項目の全体平均値は前期開始時点が 4.59 ± 0.30 点、前期終了時点は 4.69 ± 0.22 点と前期終了時点の方が高い得点を示したが、統計的な有意差は認められなかった。

表5 保育者資質46項目の平均値比較 (N=36)

	前期開始時		前期終了時		t	p
	M	SD	M	SD		
(01)遅刻しない・時間を守る	4.89	0.40	4.97	0.17	-1.14	.26
(02)文章に誤字・脱字がなく、ていねいに書く	4.50	0.56	4.58	0.50	-0.68	.50
(03)正しい言葉づかいができる	4.78	0.54	4.92	0.28	-1.41	.17
(04)気配りができる	4.72	0.51	4.92	0.28	-1.87	.07
(05)整理・整頓、そうじを積極的にする	4.72	0.51	4.61	0.49	1.00	.32
(06)自分の健康管理ができる	4.72	0.57	4.89	0.32	-1.64	.11
(07)常識がある	4.75	0.55	4.94	0.23	-1.87	.07
(08)子どもが好きである	4.72	0.51	4.78	0.49	-0.53	.60
(09)子どもへの優しさ・愛情がある	4.83	0.45	4.89	0.40	-0.63	.54
(10)子どもに積極的に関わる	4.86	0.42	4.78	0.49	1.14	.26
(11)日誌の書き方・内容が適切である	4.53	0.56	4.56	0.50	-0.23	.82
(12)子ども集団を上手につくり、リードできる	4.61	0.60	4.81	0.40	-1.87	.07
(13)子どもに対して共感的に理解できる	4.56	0.65	4.75	0.44	-1.75	.09
(14)保育で観察するべきことがわかっている	4.56	0.65	4.64	0.54	-0.68	.50
(15)まじめである	3.92	0.73	4.03	0.85	-0.89	.38
(16)活発で明るい	4.50	0.56	4.72	0.45	-1.96	.06
(17)表情が豊かである	4.69	0.58	4.75	0.44	-0.53	.60
(18)自分の考えを上手に表現できる	4.47	0.65	4.72	0.45	-2.17	.04 *
(19)指導案を上手に書ける	4.39	0.69	4.56	0.50	-1.23	.23
(20)だれにでも平等に接することができる	4.81	0.47	4.86	0.42	-0.63	.54
(21)助言や指導を素直に受け入れる	4.58	0.69	4.72	0.51	-1.00	.32
(22)反省を次に生かすことができる	4.83	0.45	4.83	0.38	0.00	1.00
(23)時間配分ができる	4.64	0.59	4.83	0.38	-1.56	.13
(24)遊びや活動への導入が上手にできる	4.72	0.51	4.81	0.40	-0.77	.45
(25)適切な言葉かけができる	4.64	0.64	4.92	0.28	-2.38	.02 *
(26)落ち着いた対応ができる	4.61	0.60	4.81	0.47	-1.75	.09
(27)時や場合に合った行動ができる	4.69	0.58	4.86	0.35	-1.64	.11
(28)保育の工夫やアイデアが豊富である	4.50	0.70	4.75	0.44	-1.86	.07
(29)けじめのある指導ができる	4.58	0.60	4.75	0.44	-1.44	.16
(30)子どもの発達を理解し、それに即した指導ができる	4.78	0.49	4.92	0.28	-1.54	.13
(31)絵・図が上手である	4.06	0.53	4.14	0.54	-0.77	.45
(32)手遊びが上手である	4.11	0.52	4.19	0.58	-0.77	.45
(33)ダンスなどの身体表現が上手である	4.00	0.54	4.00	0.59	0.00	1.00
(34)ピアノ・歌が上手である	4.17	0.56	4.39	0.55	-2.09	.04 *
(35)集団遊び・ゲーム遊びの指導が上手である	4.44	0.56	4.56	0.56	-0.85	.40
(36)絵本・紙芝居などを上手に読む	4.42	0.55	4.36	0.54	0.53	.60
(37)教材研究・準備に熱心に取り組む	4.61	0.60	4.47	0.61	1.09	.28
(38)自分に自信をもっている	4.17	0.70	4.39	0.65	-1.85	.07
(39)積極的に物事に取り組む	4.75	0.44	4.75	0.44	0.00	1.00
(40)協調性がある	4.81	0.40	4.78	0.42	0.37	.71
(41)責任感がある	4.81	0.40	4.92	0.28	-1.67	.10
(42)向上心がある	4.72	0.45	4.81	0.40	-0.90	.37
(43)特別な支援を必要とする子どもを理解し、それに即した指導ができる	4.83	0.38	4.83	0.38	0.00	1.00
(44)保護者と円滑なコミュニケーションがとれる	4.78	0.42	4.92	0.28	-1.71	.10
(45)地域の子育て家庭に対して相談・支援ができる	4.69	0.45	4.67	0.54	0.26	.80
(46)保育中の病気やケガなど、子どもの症状に応じて対処できる	4.78	0.42	4.83	0.38	-0.63	.54
項目平均	4.59	0.30	4.69	0.22	-1.75	.09

注) M：平均値, SD：標準偏差, *：p<.05（両側検定）

前期開始時点ではすべての項目にわたって高い得点（平均値の範囲：3.92～4.89）を示した。このような結果については吉村ら（2007）も同様な報告をしており、入学直後の学生にとっては調査項目すべてが身につけなければならない重要なことととらえていると推察された。項目のなかでは特に、「(01)遅刻しない・時間を守る（ 4.89 ± 0.40 点）」「(10)子どもに積極的に関わる（ 4.86 ± 0.42 点）」「(09)子どもへの優しさ・愛情がある（ 4.83 ± 0.45 点）」「(22)反省を次に生かすことができる（ 4.83 ± 0.45 点）」「(43)特別な支援を必要とする子どもを理解し、それに即した指導ができる（ 4.83 ± 0.38 点）」「(20)だれにでも平等に接することができる（ 4.81 ± 0.47 点）」「(40)協調性がある（ 4.81 ± 0.40 点）」「(41)責任感がある（ 4.81 ± 0.40 点）」などの項目がとりわけ高い得点であった。これらは保育者としてのマナーや常識の側面と子どもに対する基本的な対応に関する項目であり、入学時点では保育者の資質としてこのような点に強い必要性を感じていることが明らかとなった。

前期終了時点では、平均値の範囲が4.00から4.97と前期開始時点よりもさらに高くなり、ほとんどの項目について強く必要性を認識する傾向にあった。特に、「(01)遅刻しない・時間を守る（ 4.97 ± 0.17 点）」「(07)常識がある（ 4.94 ± 0.23 点）」「(03)正しい言葉づかいができる（ 4.92 ± 0.28 点）」といった項目に代表されるように保育者としての常識に関することや「(25)適切な言葉がけができる（ 4.92 ± 0.28 点）」「(30)子どもの発達を理解し、それに即した指導ができる（ 4.92 ± 0.28 点）」などの項目に代表されるように保育の技術に関すること、そして、「(44)保護者と円滑なコミュニケーションがとれる（ 4.92 ± 0.28 点）」に代表されるように保護者とのコミュニケーションについての認識が高くなっていた。

項目ごとに前期開始時点と前期終了時点で平均値の差異について対応のあるt検定を用いて検討したところ、「(18)自分の考えを上手に表現できる」「(25)適切な言葉がけができる」「(34)ピアノ・歌が上手である」の3項目で有意差が認められ、いずれも前期終了時点の方が高い得点を示した。前期開始時点よりも保育の実践的な場面における技術的な側面に対して必要性の認識が強くなっている傾向があるといえ、大学での学習の深まり、あるいはボランティア活動等において子どもと直接的な関わりをもつ経験が増えたことなどが影響していると推察された。この点では、富岡（2007）が保育者資質の認識について実習前後での差異を検討し、実習後はより具体的な保育実践にかかわる能力や態度の認識が高くなることを報告していることから、初年次においては理論的な学習が中心のカリキュラムであったとしても同様な傾向が認められたと考える。

IV. 総括

社会福祉系の学科内に設置された4年制保育士養成課程に在籍する1年生を対象とし、保育者として必要な知識、技術、能力、態度等の総体を保育者資質ととらえて、その認識が入学直後である前期授業開始時点と前期授業終了時点の半期間でどのような変化が認められるかを検討

した。その結果、保育者資質を意味する47項目の全体平均値は前期開始時点の 4.59 ± 0.30 点に対して前期終了時点では 4.69 ± 0.22 点と認識の程度が高くなり、項目ごとにみても前期終了時点の方が高い得点を示す傾向にあった。特に、前期開始時点では保育者としてのマナーや常識の側面と子どもに対する基本的な対応に関する側面で高い得点を示す傾向にあったが、前期終了時点ではこれらに加えて保育の実際場面における技術的な側面に高い得点を示す傾向が認められた。また、「自分の考えを上手に表現できる」「適切な言葉がけができる」「ピアノ・歌が上手である」の3項目では有意差が認められ、大学での授業の深まりやさまざまな経験を通じてより実践的な場面での対応についての必要性を認識していた。教育の分野においてはいわゆる理論と実践の関連性、結びつきがよく指摘され、初年次における保育に関する基礎的な理論学習は重要視しなければならないところではある。しかしながら、1年次の前期終了時点で保育場面における実践的な技術の側面に認識が強くなっていることから、基礎理論の学習効果を高めるためにも保育場面の実際をどのような形で経験させていくかが保育者としての質の確保や向上させる一つのポイントになることが示唆された。

本研究においては、調査対象が事例的であったことや平均値の比較検討をするうえで影響要因を明確にしていけない問題点があると考えられる。しかしながら、時系列的なデータを積み重ねていくことはより質の高い保育者を養成するためのカリキュラムを模索していくうえで大きな意味があると考えられる。したがって、今後は用いた調査項目の妥当性についても再度検討を加え、よりの確な保育者資質の認識構造を把握していく必要があると思われる。

引用文献

- ベネッセ次世代育成研究所（2011）第4回幼児の生活アンケート。
<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/research/research_13.html> (September 23, 2011)
- 厚生労働省（2006）平成16年度全国家庭児童調査結果の概要。
<<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0630-6.html>> (September 23, 2011)
- 厚生労働省（2008）保育所における障害児の増加。
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/10/dl/s1027-10a_003.pdf> (September 23, 2011)
- 厚生労働省（2011a）保育所入所待機児童数（平成22年10月）
<<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000014191.html>> (September 23, 2011)
- 厚生労働省（2011b）子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第7次報告概要）及び児童虐待相談対応件数。
<<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001jiq1.html>> (September 23, 2011)
- 富岡麻由子（2007）保育士・幼稚園教諭養成校の学生のもつ保育者イメージの変容—入学後の最初の実習前後の比較—。日本保育学会第60回大会発表論文集，1264-1265。
- 吉村啓子・添田久美子・吉村 英（2005）保育者養成課程在学生の幼稚園教諭資質と保育士資質に対する認識の違い—保育者適性自己判断をてがかりとして—。京都光華女子大学短期大学部研究紀要，43，70-71。
- 吉村 英・吉村啓子（2007）保育者の資質に対する女子学生の意識—幼稚園教諭と保育士資質の比較—。京都女子大学発達教育学部紀要，3，43-58。

参考文献

- 青木 通・浪越一喜（2011a）大学生の保育者資質に関する意識変容の検討．日本保育学会第64回大会予稿集，507.
- 青木 通・浪越一喜（2011b）大学生の保育者資質に関する意識変容の検討(2)．全国保育士養成協議会第50回研究大会研究発表論文集，256-257.
- 江田美代子（2007）保育士に求められる資質能力に関する調査研究．宮崎女子短期大学紀要，34，31-46.
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書．フレーベル館.
- 内閣府（2011）平成23年版子ども・子育て白書.
- 小田 豊・笠間浩幸・柏原栄子（2009）保育者論．北大樹書房.
- 佐藤 進・山次俊介・長澤吉則（2007）健康・スポーツ科学のためのSPSSによる統計解析入門．杏林書院.
- 高桑秀郎・濱田尚吾・太田裕子・花田嘉雄（2010）短大生が考える「保育者に求められる資質」に関する意識についての検討—現場幼稚園教諭の意識との比較から—．羽陽学園短期大学紀要，8(4)，473-480.
- 富岡麻由子（2009）保育士・幼稚園教諭養成校の学生のもつ「保育者に求められる資質」の認識—実習の経験による比較—．保育士養成研究，27，1-10.
- 矢藤誠慈郎・諏訪英広・山中 文・湯藤定宗・岡本知子（2005）保育士の資質・力量における養成校への役割期待—保育士への調査から—．保育士養成研究，23，67-74.

（2011.10.6 受稿，2011.10.17 受理）